

Title	大岡昇平『サンホセの聖母』の意味
Author(s)	林, 姿瑩
Citation	阪大近代文学研究. 2018, 16, p. 33-52
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/68148">https://doi.org/10.18910/68148</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 大岡昇平『サンホセの聖母』の意味

林 姿瑩

## はじめに

大岡昇平（一九〇九―八八）は一九四四年に召集され、同年七月に補充兵としてフィリピン戦線に送られた。その翌年一月に米軍に捕われ、俘虜収容所で敗戦を迎え、十二月に復員した。復員後第一作「俘虜記」（一九四八・二、後「捉まるまで」に改題される）は、大岡自身の戦争体験、特に捕われるまでの二十四時間を中心に描いた作品であり、大岡の出世作となった。大岡の「疎開日記」<sup>(1)</sup>には、一九四六年四月二七日に「捉まるまで」という題名とその文体に関するメモが書いてあり、同年六月二七日に書き上げた「俘虜記」初稿について「小林にほめられた」と記してある。これと同じ日、『野火』の原型にあたる「狂人日記」が執筆され、翌四七年一二月三日に『野火』に一転換<sup>(2)</sup>されたという。作家デビュー以前に構想されたこの二作は、後にそれぞれ大岡の代表的戦争小説『野火』（一九五二・二二）、合本『俘虜記』（同・一一）となる。前者はレイテ戦を背景にしたフィクシ

ョンであり、後者は大岡が自分の俘虜体験をもとにして書き上げた作品である。

一方、大岡自身の出征・ミンドロ島のサンホセでの駐屯・警備・そして敗走の経験については、『野火』『俘虜記』ではなく、一連の短編戦争小説で描かれている。これらの短編は『野火』『俘虜記』と同じく一人称「私」で書かれており、四九年から五〇年までの二年間に集中的に発表されている。本稿の末尾に付け加えた【表一】「大岡昇平の初期戦争小説の発表一覧」を見ると、俘虜物の連作と、フィクションの「野火」の連載と、戦地での体験を描いたこれらの短編という三つの系列の作品は、同時期に交錯しながら発表されていくことがわかる。大岡の戦争体験及びそれに基づいて創作された戦争文学を知るためには、『野火』『俘虜記』のみならず、短編戦争小説という系列をおさえることも極めて重要だと言える。しかし、『野火』『俘虜記』が大岡の代表作として定着していったのに対して、短編戦争小説はそれほど注目されなかったのである。

大岡は『俘虜記』（四八・一一）と『続俘虜記』（四九・一二）に次いで十二編の短編戦争小説を集めた『サンホセの聖母』（五〇・六）を刊行した。これは大岡が補充兵としての体験に基づいて創作した作品をまとめて示した最初の単行本である。三年後、角川書店により文庫本が出版されたが、収録内容に異同があり、再版もなされなかった。一九七七年に「出征」から「捉まるまで」、「わが復員」までの十五編が『ある補充兵の戦い』にまとめられて出版された<sup>(2)</sup>。同じ戦争を描いた『野火』、合本『俘虜記』の刊行と比べれば、はじめ大岡にはこれらの短編戦争小説をひとまとまりのある作品集として打ち出す予定はなかったということが推察される。このためか、従来の先行研究において、個別的な作品、特に「出征」や「歩哨の眼について」に関する論考はいくつかあるが<sup>(3)</sup>、この短編戦争小説群を『野火』『俘虜記』のように、一つのジャンルないし系列として捉えて、その意味を問う論考はまだ少ないのである。

尹慶一は、「同じ内容を敷衍して、別に一連の短編としたので、部隊行動の記録に限ったのである。」<sup>(4)</sup>という大岡の説明に着眼し、部隊行動の記録である『俘虜記』の付録「西矢隊始末記」と、「同じ内容を敷衍し」た『サンホセの聖母』とりわけ「出征」を例にして、両者の文体を比較している。尹は漢字カタカナ表記で記された「記録的性格」が強い「西矢隊始末記」とは異なり、「出征」を代表とする『サ

ンホセの聖母』は、「無数」の「偶然」によって「生還」した「私」という特定な位置の語り手によって語られる戦場の物語、「想起の物語」<sup>(5)</sup>だと指摘している。こうした「特定な位置の語り手」は大岡の他の戦争小説にもあてはまると思われ<sup>(6)</sup>、重要な指摘である。しかし、『サンホセの聖母』は単に「西矢隊始末記」と「同じ内容を敷衍」したもののだけではなく、『野火』『俘虜記』と並列できるほどの文学的な価値や重要性を有しているという特質を更に主張すべきではないか。花崎育代が初出の発表時期が重なっている『俘虜記』『野火』『武蔵野夫人』（五〇・一一）という三作品の関連性から大岡の戦後の出発について検討している論文において、「戦後社会における健康回復と鎮魂——それが、戦後出発期の大岡文学であった。」<sup>(7)</sup>という示唆に富む指摘をしている点に鑑みると、同じ戦後出発期に書かれたこの十数編の短編戦争小説の存在も無視することはできないのではないだろうか。

そのため、本稿は大岡の三番目の単行本『サンホセの聖母』を中心に検討し、戦後出発期に書かれたこれらの短編戦争小説は、大岡の戦争小説の中でどういう意義を持っているのか、どう位置づけられるかを解明することを目的とする。

## 一 『サンホセの聖母』の成立

『サンホセの聖母』は一九五〇年六月までに発表された十

二編の短編戦争小説を集めた短編集である。この十二編は、前述した「西矢隊始末記」を敷衍しただけではなく、『俘虜記』の連作や『野火』と関わりながら書かれていった向きが見られる。例えば、短編戦争小説の中で最初に発表された「靴と食慾」(四九・一)において、「收容所でも戦場と同じく「事実」だけが「正しく」且重要であつた」のである」という認識が示されているが、この認識は俘虜物の「戦友」(四九・三)の中で「人間に関する限り戦場には行為と事実があるだけである」という形で繰り返されている。また、日本人俘虜を描いた「生きている俘虜」「戦友」「季節」の三編を収録した『続俘虜記』は、「靴と食慾」に次いで発表された、フィリピン人俘虜が登場している「俘虜逃亡」(五〇)と「西矢隊奮戦」の二編も収録している。もし出征から帰還までという従軍体験を時間順に創作するのが一般的な書き方なら、大岡はあえてそういう書き方を援用せず、創作中の俘虜物を意識しながら主題別に短編戦争小説を書いていったと言える。

一方、戦争体験という題材の使用においては『野火』との関連性が見られる。池田純澄は『野火』の成立過程を軸にして、それと他の初期作品との関連性を力説している。池田は短編戦争小説と『野火』の中で描かれている同じ出来事や光景の描写(9)を具体的に比較し、「(俘虜物)あるいは、出征、駐屯、復員を題材とした作品に描かれた実際の体験が、『野

火』では、戦場での感覚のまま幻想的な映像となつて定着している」(10)と指摘している。この論考は「実際の体験」を描く短編戦争小説と比較することで、『野火』における手法を明らかにしようとしている。これは逆から見れば、戦争体験という題材を『野火』と共有しているものの、それを「実際の体験」として描くというのが短編戦争小説群の方法とも言える。池田の論考では挙げられていない例として、熱帯風物の扱い方がある。フィリピンの熱帯風物に関する言及は、「俘虜記」(四八・二)で最初になされている。

死の観念はしかし快い観念である。比島の原色の朝焼夕焼、椰子と火焰樹は私を狂喜させた。到る処死の影を見ながら、私はこの植物が動物を圧倒してゐる熱帯の風物を眼で食つた。私は死の前にかうした生の氾濫を見せてくれた運命に感謝した。山へ入つてからの自然には椰子はなく、低地の繁茂に高原性な秩序が取つて替つたが、それも私にはますます美しく思はれた。かうして自然の懐で絶えず増大して行く快感は、私の最後の時が近づいた確実なしるしであると思はれた。

熱帯風物の描写を通して、「私の最後の時が近づいた確実なしるし」を強調している段落である。同年一二月の『文体』第三号に発表された「野火」には、「俘虜記」と同様に、

「私の死が確実に近づいたしるし」や「運命に感謝した」ことが書かれてあるが、更に「運命」に次いで「神」に言及し、風景描写を「私」の「観念と感覚の混乱」と結び付けている<sup>(11)</sup>。翌年に発表された短編戦争小説の「比島に着いた補充兵」では、「幸福」という言葉が繰り返されているように、無事に戦地に着いてその熱帯風物を見た瞬間は「生涯の最も幸福な瞬間」<sup>(12)</sup>と結びつけられる。以上の例から見ると、短編戦争小説は題材の面において他の作品と関連しているのみならず、作者大岡が戦争小説の三つの系列それぞれの中で同じ題材を意識的に書き分けていることもわかる。

「野火」の『文体』稿<sup>(13)</sup>や俘虜物との関わりの中で発表されたという背景を持っているこれらの短編戦争小説は、『野火』と合本『俘虜記』の刊行に先立って、『サンホセの聖母』というタイトルでまとめられて出版された。内容を概観すると、収録作品は初出の発表順とは関係なく、ある程度作品内部の時間に従って編成されており、「出征」から始まり「八月十日」で終る。まず「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」という三編は、作品内の時間が連続しており、「大岡」(「出征」と呼ばれる「私」が戦地に向う経緯が描かれている。次に主題が一変して、「サンホセの聖母」と「ミンドロ島誌」という二編では、フィリピンという駐屯地の歴史、地理、住民について、いくつかの小節の中で紹介されている。次の「暗号手」では、暗号手である「私」の勤務

内容と、「私」が養成した代理暗号手中山のことが語られており、その後の五編は、軍隊の行動や兵士の生活におけるいくつかの出来事を中心にした作品である。即ち、「襲撃」は一九四四年十一月、出張した部隊がゲリラに襲撃され、それを知った留守隊が警備についたという出来事を描いている。

「俘虜逃亡」は十月にゲリラを誘導した嫌疑により捉まった三人のフィリピン人が、十二月に米軍が上陸する前にそれぞれ逃げた話である。「西矢隊奮戦」は米軍上陸後、「私」の所属した西矢隊が分隊を派遣して、海岸の町で斥候する時の出来事を描いている。「食慾について」は僚友の池田と木下小隊長の異常な食慾に関する話であり、「靴の話」は僚友の松本と「私」の間に起こった靴をめぐる話と、戦場及び俘虜収容所での靴の盗難事件の話である。「靴の話」の作中時間は出征から俘虜収容所に入った後の長い期間に渡っている。収容所の話を受け継いで、巻末の「八月十日」は俘虜になった「私」が収容所で原爆のニュースや玉音放送を聞いた前後のことを描いている。ところで、山中で退避していた西矢隊がどのように壊滅したか、「私」がどのように俘虜になったかは、『サンホセの聖母』では言及されていない。

以上のように、『サンホセの聖母』は、全体的に見れば主人公「私」の「戦争」の起点と終点が示されている従軍記だと言えるが、各編の内容に注目すれば、各編は各自の持っている主題により統合され、他の短編との繋がりが比較的薄

いことがわかる。言い換えれば、『サンホセの聖母』は、『野火』『俘虜記』のような一つの完結した作品とまではいかないが、単に無機的に作品を集めた短編集でもない。主題別で浮き彫りにされた主人公「私」の従軍記だと指摘できよう。次節から、この従軍記に内包された主題やモチーフを抽出することによって、『サンホセの聖母』の特徴と意義を検討する。

## 二 兵士の心理と感覚

徴兵された一中年補充兵が死地に向っていき、死と向き合わなければならぬことを覚悟した時の感覚と心理を捉えようとする描写が、『サンホセの聖母』の最初の三作に散見される。例えば「死の予感」について、次の引用文のように、いくつかの段階に分けて細かく描出している。

死の予感は既に東京の部隊で残留を命ぜられた時から私を襲っていた。しかしそれはまだ漠然たる蓋然性の感じを出でず、その後私には色々することがあった。しかし今こうして出港地で無為に過すうちに、だんだんはつきりした輪郭を取るようになった。(…)死の予感が、どういう感覚であるかをいうのはむずかしい。内臓を抜かれたような、一種の虚脱した圧迫感とでもいうほかはない。無論一日の大半は日常の関心事にかまけている。

ふと何かの動作の間に、ああしかし自分はもうすぐ死ぬんだという考えが浮ぶ。外界はその時すべて特別な色合を帯びて来る。例えば光るものは一層光り、影は一層暗く、物音が遠くなつたように感じる。しかしこの感覚はそれほど不快ではない。／＼この快い予感の結末はしかし、比島の山中でマラリヤのため敵前で落伍して、死と直面した時の強い圧迫感であった。何かまわりからどうともならないものにしめつけられるような感覚である。殺される者が殺人者に直面して、どうしても遁れられないと観念した時、或いはこういう感覚を味うかも知れない。  
(「出征」)

東京から出港地へ移動するにつれ、「死の予感」は「漠然たる蓋然性の感じ」から「だんだんはつきりした輪郭を取るようにな」る。「一種の虚脱した圧迫感」のような心象は、敵前で落伍した時には「強い圧迫感」になって来る。「私」は死を予感していると直接に書く代わりに、「内臓を抜かれたような」といった説明や比喻を付け加えて、表現しにくい抽象的な死と向き合う感覚を描こうとしているのである。

或いは「海上にて」では、「船は単調なディーゼル・エンジンの音を立て、単調な水の上を進んで行つた。(…)孤独な囚人、兵士たる私にとつて、海の無限の運動はむしろ苦痛である。」とあるように、船の音や波の動きの描写を通して、

輸送船上にいる「私」の潜水艦に対する不安と囚人になったような気分から生じる苦痛が描かれている。これらの例を見ると、比喩や風景描写を利用して表現を工夫し、その時の自分の感覚を再現しようとしている書き方が特徴だと言える。

「死」をめぐる感覚の他、軍隊として行動している際の兵士の緊張感も描かれている。

私はこの人影が絶えたら、覚悟する時だと思った。／しかし何となく危険の感じはぴんと来ない。怖くもなかった。異常事はそれが実際に来るまでは、とても起り得ないような気がするものである。そして来てからでは間に合わない。／それでも私は緊張していた。銃を壕の前の土面に構え、敵が現われれば、すぐ撃つつもりであった。

(「襲撃」)

兵士が銃を下げ、腰をかがめ、おずおずと一列に開いた庭に行くのは異様な眺めであった。自分を棚に上げるようであるが、私はこの時わが同僚たる補充兵をつくづく滑稽と思わざるを得なかった。(…)中隊長に続いて分隊長が「散れ」と叫びつつ飛び出した。しかし二、三人出ると次の兵士は門柱にしがみついて止ってしまった。その又次の兵士も前者を迂廻することをせず止ったので、以下ずっと一列に止ってしまった。(…)「馬鹿野郎」と中隊長は笑いながら怒鳴った。「そんな散歩みたいな恰

好で偵察が出来るか、何故伏せないか」二人はすぐその場に伏せた。／「軒下へ入れ」と分隊長が怒鳴った。

(「西矢隊奮戦」)

「危険の感じはぴんと来ない」が、それでも「緊張していた」という気が動転する様子を表す描写や、「門柱にしがみついて」といった動作の描写を通して、中年補充兵という弱兵が任務につく時に抱く緊張感が再現されている。「西矢隊奮戦」という作品タイトルに対応しているように、緊張極まらない兵士たちは、いるはずの敵というより、各自で自身の緊張や恐怖や不気味な感情を相手に「奮戦」しなければならぬ。緊迫した状況において、兵士が自己の生のために「奮戦」している姿が如実に描出されていると言える。

こうして心理や感情を詳細に描写する一方で、そういう心理や感情を起こさせた「事実」や「政治」にも目を向ける傾向も見られる。例えば、前述した「出征」の末尾には、「その時の私の中の感情は、私が出征によって、祖国の外へ、死へ向って積み出されて行くという事実を蔽うに足りない」との記述がある。つまり、「私」の「感情」が「出征」という「事実」によって全て不可視にされたということであり、それは、どんな感情を持っていても、どれほどそれを表現しても、出征という「事実」に見合うような感情はないということである。ここで、個人の心理及び事実への認識を共に示す

ことによつて、心理を表現することの難しき、戦争という「事実」の持つ重さが提示されている。「事実」によつて「心理」が不可視にされるといふことは、「靴の話」においてより明確に表現されている。

(…) その時の私の心理は複雑といへば複雑、簡単といへば簡単である。その描き方は幾通りもある。例えば(…) と書けばこれは弁解であり、従つて誇張である。(…) と書けばこれはシニシズムであり、やはり誇張である。(…) しかしこう書いてもなお私はその時の私の心理を正確に描いたとは感じない。／結局靴だけが「事実」である。こういう脆い靴で兵士に戦ふことを強いた国家の弱点だけが「事実」である。それは必ずしもその兵士の心理に、私はこう思った、ああ感じたという風に働きはしないが、根本においてそれを決定している。

(「靴の話」)

「靴」の所有権をめぐる言い争いの最中、「私」は自分の内面を具体的かつ正確に捉えようと試みている。同時に、いくら必死に心理を捉えようとしても、捉え難い、或いは掴みきれない部分が依然として存在しているのだと主張されている。そこで、それを「決定している」圧倒的な「事実」——脆い靴、国家の弱点——という存在が強調されるのである。

以上のように、死と向き合う兵士の心理の動きや感情の複雑さを細かくかつ具体的に再現しようとするのが、『サンホセの聖母』の主題の一つだとわかる。こうして兵士の心理を表現しようとすると同時に、それを決定している「事実」をも見究めようとするのである。心理描写と「事実」とは、相乗関係にあり、心理描写が執拗に書かれれば書かれるほど、「事実」の存在はより大きくなる。換言すれば、出征や国家の弱点、更に戦争といった動かし難い「事実」が重ければ重いほど、そういう状況に置かれた人間の心理の捉え難さ、また戦争の非人間性がより一層強調されるという効果があるのである。この重い「事実」を前にして、人間の存在や心理はいかにあり得るのか、という問いかけ、及び自己確認が、これらの短編戦争小説の特徴の一つだと考えられる。

### 三 自己反省及び軍部批判

『サンホセの聖母』では、戦地の住民に対する認識や異民族間の交流を主題とした作品が配置されている。これは『野火』や『俘虜記』には見られない主題だと言える。「住民は信心深かった。」(「ミンドロ島誌」)、「サンホセの町の上流階級は麻雀に耽り、下層民は鬪鶏に耽る。」(「サンホセの聖母」)、「比島の恋人達はむしろ甚だ感傷的に見えた。」(「比島に着いた補充兵」)とあるように、「生れて初めて外国を見



る」(同)「私」の異民族・異文化への観察や認識がかなり多く述べられている。しかも、それは単なる表面的な観察に止まらず、占領軍と占領された住民の背後にある政治的な権力関係も見据えているのが特徴である。代表例としては、炊事を手伝っている町の少年と兵士たちとの付き合いが挙げられる。

善良な日本兵は彼等と仲好くなつた。我々はみなその年初めて召集された補充兵で、住民からものを取りあげたり、饗応を強制する習慣がなかつたので評判がよかつた。(…)町の少年の一人を残飯を報酬に炊事を手伝わせたが、兵士等と彼との間の愛情は随分感傷的になつた。しかし或る日は突然イリン島に逃げて行つてしまつた。一週間の後米軍が上陸した。政治は万事を決定する。人間の感情さえも。(「サンホセの聖母」)

「善良な日本兵は彼等と仲好くなつた」ということに己惚れず、兵士たちに愛された町の少年が逃げて行つてしまつたことに対して、「政治は万事を決定する。人間の感情さえも。」という認識を示している。ここで言う「政治」とは、通常使われるより広い意味であり、敵味方の関係、国是による立場の違い、植民地支配などを指しているのである。

「バタンガスの」住民の眼がマニラ市民のそれよりも悪意に満ちていたのは、町がかって砲撃を受けたからである。(「比島に着いた補充兵」)

建物は木造、屋根は例の赤トタンで葺いてある。このトタンの赤が要するにサンホセの支配的色彩である。(「サンホセの聖母」)

どうして生計を立てているのか我々は知らない。(…)

占領下の住民の生活は占領軍にはわからない。(「サンホセの聖母」)

引用文からわかるように、万事を決定する「政治」の影響は住民の生活の至るところにあると「私」は観察している。『サンホセの聖母』の中で、多くの外国人、南洋の風景が書かれているが、それは異国情緒的な雰囲気漂わせるためではなく、戦争という状況下に置かれた人間同士の関係に対する反省のためだとわかる。結局、「私」を含めた日本軍とは、フィリピン人に「独立を与えた」(「俘虜逃亡」)解放軍ではなく、「圧制者」(同)、或いは「占領軍」(「サンホセの聖母」)でしかないのだというかなり醒めた認識と自覚に至るのである。

こうした認識と自覚は日本の軍隊や兵士、更に自分自身にも向けられている。「そういう不具者のようにずんぐりした兵隊は、同じ船にも沢山いた。これも私にとっては祖国の敗

兆の一つであった。」(「出征」)、「船艙はしかし隔壁一つなく、外壁も戦標型通有のボール紙のような鉄板で、どうもそれほどの不沈艦とは思われない。」(「海上にて」)という文章のよ  
うに、日本軍の弱さが繰り返し掲げられている。更に、日本軍の持つ組織の問題も指摘されている。

住民の訊問などのため、部隊に一人タガログ語を知っている者が要るのは事実であった。しかしそれを兵士の間から養成するということは日本の軍隊の組織では出来ないのである。私はトラブルを惧れて隊長にも何もいわず、熱帯潰瘍でゲートルが巻けないのを口実に、外出の回数を減らした。(「暗号手」)

この短編では、機密情報を知っている二等兵の暗号手である「私」と、それを知らない下士官と、「私」に嫉妬している一般兵との間に生じる「微妙な関係」が語られる。こうして「私」が日本軍の問題や弱さを指摘するのは、敗戦の責任を免れるためではなく、その根本的な弱さを無視して、或いはそれを知りながら、なお戦争を続行する軍部の誤判をほめかすためだと考えられる。

軍部を批判するために、『サンホセの聖母』は初出時間が近い二編——巻頭の「出征」と巻末の「八月十日」において、その批判の論理を構築しようとする意図が見られる。まず、

「出征」では、何故反抗しなかったのかという自己反省が目立つ。

私はこの負け戦が貧しい日本の資本家の自暴自棄と、旧弊な軍人の虚栄心から始められたと思っていた。そのために私が犠牲になるのは馬鹿げていたが、非力な私が彼等を止めるため何もすることが出来なかった以上止むを得ない。(…)民間で権力に抗うのが民衆が欺されてい  
る以上無意味であるのにもまして、軍隊内で軍に反抗するのは、軍が思うままに反抗者を処理することが出来る以上、無意味であった。私はやはり「死ぬとは限らない」という一縷の望みにすべてを賭けるほかはないのを納得しなければならなかった。／私はいかにも自分が愚劣であることを痛感したが、これが理想を持たない私の生活の必然の結果であった以上、止むを得なかった。

(「出征」)

「私」は、徴兵された自分という犠牲の存在を馬鹿げていると思っているが、資本家と軍部を止めるために「何もすることが出来なかった」「愚劣」な自分をも明確に認識している。ここからは、自分もある種の戦争協力者であるという自己批判を読み取ることができ、軍部を非難するような文句は控えられていることが窺える。

しかし、「八月十日」では、原爆に対する軍部の反応への批判がなされている。「私」は広島に落ちた原爆のニュースを知った自分に起こった「不安」について反省しはじめた。「こういう戦場の光景を凄惨と感じるのは観者の眼の感傷である。(…)しかもその人間は多く戦時或いは国家が戦争準備中、喜んで恩恵を受けていたものであり、正しくいえば、すべて身から出た錆なのである。」という反省と冷徹な認識が提示される。こう反省した上で、「私」は更に次の引用文のように「不安」の原因を突き詰めていく。

私は結局私の不安の原因を、同胞が一瞬に多勢死ぬという情況の想像が、私の精神に及ぼす影響より求められない。そして、もともと社会的感情を欠く小市民たる私の精神が、これほど「多数」に動かされるのは、人類の群居本能よりないと思われる。純粹に生物学的な感情だ。／生物学的感情から私は真剣に軍部を憎んだ。専門家である彼等が戦局の絶望を知らぬはずがない。(…)

その彼等が原子爆弾の威力を見ながら、なお降伏を延期しているのは、一重に自ら戦争犯罪人として処刑されたくないからであろう。彼等がこの戦争を始めた原因は色々あり、彼等の意のままにならぬものがあつたのはわかっているが、この際無為に日を送っているのは、彼等の自己保存という生物学的本能のほかはない。従って私は

彼等を生物学的に憎む権利がある。(「八月十日」)

「身から出た錆」という冷徹な認識は「出征」に書かれた反省の立場を受け継いだものであるが、「八月十日」では、更に「私」が感じた不安の原因である「人類の群居本能」という「生物学的な感情」が提示されるのである。同時に、何故軍部が降伏を延期し、原爆の被害まで引き起こしたのかについて、それは「自己保存という生物学的本能」という原因が提起されている。そうして、「私」が「不安」を感じたことと軍部が降伏を延期したことは、等しく「生物学的本能」の次元に属する事柄であるとの論理が説かれている。戦争を始めようとする軍部に反抗しなかった「私」がいざ徴兵される段になると、彼らを批判する筋合いはないと認識してはいないものの、軍部が降伏を延期したことも、原爆を知った時に「私」が感じた不安も、同じく「生物学的本能」から発した行動ないし感情であるため、この基準をもって、軍部批判が可能になったわけである。言い換えれば、この純粹な「生物学的な感情」は、降伏を延期した軍部に対する批判を可能にする立脚点であるのだ。「出征」では自分の犠牲は「止むを得ない」という心情が繰り返されているのに対し、「八月十日」では、八月六日以後の軍部の行動に対して「憎む」という明確な感情表現と非難がなされているのである。

「八月十日」の末尾では、八月十五日に日本人の俘虜と収

容所の米兵が握手をする場面がある。米兵は英語で「これから日本とアメリカは仲良くやっ行って行こう」と言つて、その俘虜は「私」の翻訳を聞くと、直接に「サンキュー」と米兵に返事する。これは米兵やアメリカに媚びる場面ではなく、二人の間に戦争という「政治」的な要素がなくなると、同じ人間同士、対等に接することができるといふメッセージが含まれていると読み取れよう。『サンホセの聖母』の最後の章、最後の場面として、これは極めて象徴的である。

「八月十日」は後に『俘虜記』に一章として収められている。俘虜の墮落への批判及び反省が主題となる『俘虜記』全体を見渡す時、「八月十日」で書かれた軍部批判に焦点をあてるのは些か難しく思われる。しかし、『サンホセの聖母』においては、権力や軍に反抗しなかつた自分を反省した「出征」や、圧制者・占領軍である自分への認識を示した「サンホセの聖母」といった作品と合わせて検討すれば、これらの短編で形成されていった反省や批判の論述は明瞭に読み取られるのではないか。これは「八月十日」を収録した『サンホセの聖母』ならではの特徴だと言える。

#### 四 亡くなった僚友への再認識

戦争という状況や政治的な権力関係が「万事を決定する」と指摘する一方で、『サンホセの聖母』では僚友を紹介している段落において、そのマイナスな面を述べた後、プラスな

面にも言及するという僚友の描き方が見られる<sup>(4)</sup>。例えば「襲撃」において、「私」は小林衛生兵が死の直前に「これから天皇陛下万歳をいうから、そこで聞いていてくれ」という言動に対して、「これは一つの演技」だと指摘しているが、その後すぐ「それだからといって真実でないということにはならない。演じなければならぬ真実というものはある」と再説している。更に次のような文章が続く。

天皇陛下万歳は恐らく明治以来の御真影教育の結果であろう。教育に政治が介入すれば必ず欺瞞になるが、人民は実はそうやすやすと欺されるものではない。小林衛生兵の中で政治の欺瞞が真実となつたについては、この若者は別に孝行とか勤勉とかいう道徳律があつて、それが天皇崇拜という頂点を必要としたのであろう。日本人が神を持たないからだ。(「襲撃」)

つまり、「天皇陛下万歳」と三唱することは政治に「欺され」た結果であり、「演技」をしているように見えるが、そのことは必ずしも小林衛生兵が虚偽に満ちた人間であることを意味しない。小林が「天皇陛下万歳」と三唱したのは、単に「天皇崇拜」のためだけではなく、「神を持たない」日本人の「孝行とか勤勉とかいう道徳律」の「頂点」或いは一種の自己表現のためだと論じられている。しかも、「彼の勤務

は勤勉で親切であった」という彼の普段の行いから傍証できるため、ここで「私」は小林衛生兵のそうした「演技」の意味を再解釈し、彼を評価しようとしていることがわかる。

他にも、木下小隊長の滑稽な言動や異常な食い意地といったマイナスイメージを描いた後、「私」は彼の中にある「人間の真実」の存在を見出している。

病兵を慰めた彼の言葉を私は今は憶えていないが、しかしその声音に含まれた真実な同情の響きを憶えている。

(…) 滑稽のヴェールは、その下にある人間の真実を蔽う最も厚いヴェールである。(「食慾について」)

彼の声に「真実な同情の響き」を見出すことによって、「最も厚い」「滑稽のヴェール」の下に、戦争に破壊されていない彼の人間性を認めるわけである。つまり、木下小隊長は「兵士の軽侮的」で「一見エゴイストであると思われるが、「私」は彼における「人間の真実」を発見することによって彼を再認識しようとしているのだ。また「暗号手」では、軍隊で出世するために「陰惨な会社員の政治学」に奉仕した代理暗号手中山を「私」は批判しているが、作品の末尾においては「軍隊で出世しようと思ったのも、単なる防禦にすぎなかった。要するにこれは一個のおとなしい男であった」と認め、「私」は彼の本来の姿を捉え直そうとしていると言える。

要するに、人間関係の間に介在する「政治」や、僚友たちのエゴイズムや愚劣さを批評的に描きつつも、それと同時に「私」は最後には戦争や政治的な力関係に影響されない、彼らの人間としての「真実」の一面を見出そうとし、彼らの再認識を試みようとしている。したがって、『サンホセの聖母』において、死んだ僚友の中に戦争によって破壊された人間性をもう一度見出し、彼らを一人間として再評価しようとする点は、生きている俘虜の同僚を描いた『俘虜記』や孤独な敗兵を描いた『野火』にはない特徴であると言える。

## 五 〈サンホセの聖母〉という題名の意味

『サンホセの聖母』のもう一つ際立った特徴はその書名である。〈サンホセの聖母〉とは第四編に配置された「サンホセの聖母」という短編のことであり、更にこの短編中の第二節「サンホセの聖母」<sup>(15)</sup>と繋がっている。したがって、より正確に言えば、単行本の題名は「サンホセの聖母」という一節と深く結びついているのである。この「サンホセの聖母」という一節では、フィリピンの教会や司祭といった宗教に関する内容が語られる。

正面の仕切りの奥には十字架にかけられたキリストの像がある。私はこれまで二、三度日本の旧教の教会に入つたことがあるが、この種の像に感心したことはない。蠟

細工らしい蒼白い肌が屍の色を、黒ずんだ赤が凝固した血を表わすとすれば、これは甚だ悪い写真主義である。／三方の壁にはキリストの受難を描いた油絵が懸け並べられてあり、やはり夥しい血潮が、画面の主調をなしていた。(…)そして私がこうして特に血に感じたのは、この時前線へ来た兵士であったためである。(「サンホセの聖母」)

「前線へ来た兵士」たる「私」には、キリストの像や受難図の「屍の色」と「夥しい血潮」ばかりが眼につき、少しも感心できない。それにも拘らず「私」は、「聖母子像」を背にして子供を抱いて坐っている主婦の顔に溢れた「幸福」に打たれ、「私は満足した」との一句をもつてこの節を結ぶのである。

子供の命名式で、親類や近所の人と教会から帰ったところであった。／板の壁には特に聖母子像がはってあった。風絵のような拙悪な木版で、キリストの頬は撫子色であり、後光は菜の花色であった。画像を背に主婦は子供を抱いて坐り、黙って私を見凝めた。／その顔に溢れた幸福に私は打たれた。彼女の表情を構成する細部の描写から、その幸福の種類を実証する筆を私は持たないが、要するにそこには私の兵士の意識では眼を蔽いたくなるよ

うな幸福の表出があった。私は日本の女にこういう表情を見たことがない。(…)その後或る日私はこの主婦と町の通りで逢った。(…)その歩き振りは病後らしい倦怠の中に落ちついた節度あり、ダンスの好きな雑貨店の売子など足許にも及ばぬ威厳があった。私は満足した。(「サンホセの聖母」)

この主婦は「私」が提供したキニーネ剤によってマラリヤを治癒することができたが、恩人であるはずの「私」に対して、特に感謝を示していない。「私」の提供した薬がなかったら、この主婦は恐らく自分の生と子供の生の喜びを享受できなかつたであろうことを考えると、「私」がそういつた彼女の態度に言及せず、却つて「満足した」のは、兵士である自分も彼女に幸福をもたらした一人であることを意識したためであろう。「その顔に溢れた幸福に私は打たれた。」  
「そこには私の兵士の意識では眼を蔽いたくなるような幸福の表出があった。」という表現までなされているのは、つまり「私」が助けたこの主婦の平凡で日常的な幸福が、前途には「死」しかない非日常な生活を送っている兵士の「私」にとって、また「圧制者」としてやってきた日本兵の「私」にとって、一種の救済となつたからだと解釈できよう。この些細な救済は兵士としての「私」の幸福の源であるとも言える。「出征」を参照すれば、「私」には五歳の娘と三歳の息子

がある。妻に残した遺言にある「倅せがあると思つたら迷つてはいけない」という文章には、夫をなくした妻の「倅せ」への祈りと、妻に積極的に「幸福」を追求してほしいという願望が込められている。また、自分の死と子供の教育の問題についての反省も述べられている。

私の子供が私の死によつて学資を失うのはたしかに一種の不幸であるが、そのため却つて学生の集团的腐敗より免かれ得るならば、これは望外の倅せかも知れない。

(16) (「出征」)

こうしてみると、妻子の幸福を守れずに戦争の前線に赴かされた「私」にとつて、自分の死地であるサンホセにおいて、ある一人の主婦の命を助けることができ、彼女の幸福な顔と子供の新しい誕生に出会つたということが、彼女の幸福な顔と来事であつたのではないか。キリスト像や受難図には感心できな「私」が、この生き生きとした母子像には感動したのもそれゆえであろう。兵士にとつては異色なこの偶然の体験を通して、この主婦は「私」にとつてまるで聖母のような存在になつたのである。

まとめると、〈サンホセの聖母〉とは、戦地に生きる住民の幸福と、純粹な生の喜びの象徴となつていただけではなく、戦争のために幸福と訣別した兵士個人にもたらされた些細な

救済そのものでもあり、また国に残っている妻子の幸福への願いという意味も含まれているとわかる。作者大岡は何故この戦争小説集の題名に〈サンホセの聖母〉というやや違和感のある一句をもつてきたのだろうか。それは恐らく、斯様な象徴性を生かして、戦争に翻弄された個人のこの異色な体験を描くことで、戦争に対する個人の抵抗精神と祈念とを示そうとしたためではないだろうか。

終わりに

『サンホセの聖母』は、大岡昇平が自分の出征・駐屯体験に基づいて創作した戦争小説集であるが、その体験をルポルタージュ作品として描くのではなく、かつて自分が戦争において感じたこと、認識したこと、及びいくつかの出来事を主題別に書いていきながら、主人公「私」の従軍を描いた短編集であることがわかつた。本稿は、『サンホセの聖母』に収録された短編戦争小説の特徴を四点にまとめた。まず、生死に直面する兵士の心理や戦場における瞬間の感情をどう捉えるのか、戦争という重い「事実」や「政治」とはどういうものなのかといった抽象的な一面を、表現を工夫して書き留めようとする点である。次に、自分をも含めた日本兵・日本軍に対する反省と、軍部を批判する立脚点への模索を行う点にある。三つ目は、「暗号手」の末尾の「中山の霊よ安かれ」に象徴されるように、戦場で亡くなつた僚友のエゴイスチッ

クな言動を暴くのみならず、その本来の姿を見出すことによつて彼らを再評価し、彼らを鎮魂するという描き方を取る点である。最後に、戦地の住民の幸福や、兵士の「私」の救済や祈念などを象徴した〈サンホセの聖母〉を単行本のタイトルに用いた点である。兵士の心理描写といい、戦争に翻弄された住民や兵士をめぐる描写といい、自己反省や軍部批判といい、それぞれの特徴は断片的に書かれているように見えるが、すべての根底には戦争とは何かという問い、戦争そのものへの反省と批判が据えられている。体験を語る場のみならず、心理を確認する場、批判を示す場として、『サンホセの聖母』という戦争小説の価値と意義は認められるのである。

これは明らかに『俘虜記』や『野火』とは性質を異にしている。『俘虜記』の「捉まるまで」では、出征から捉まるまでの経緯は語られているが、死の予感が緊迫感を持って来る変化や、恐怖、幸福感に関する描写は少なく、反抗しなかった自分への綿密な反省も、戦地の住民との交流なども見られない。『野火』は短編戦争小説と同じ出来事、光景を共有しているが、それは孤独な敗兵が狂気に陥っていくという体験を創り上げるための描写であり、『サンホセの聖母』のように、体験の実際の経緯を辿りながら、出来事や光景を一つ一つ押さえて描いていくのではない。以上のように、戦争体験を持つ大岡が、戦場で何を見、何を感じ、何を考えたかを知るために、『サンホセの聖母』を代表とする一連の短編戦争

小説は最も直接的な手掛かりとなる。同時に、『野火』『俘虜記』では語られなかった部分が補われている『サンホセの聖母』は、大岡の戦争小説について考える時、重要な位置を占めていると言いうことができるだろう。

〔付記〕大岡昇平の作品からの引用は、特記しない限り、筑摩書房刊『大岡昇平全集』全二三巻別巻一（一九九四・十）二〇〇三・八）に拠る。引用部の傍線は引用者が付したものである。（…）は中略、／は改行を意味する。なお引用に際して旧字体の漢字を新字に改め、ルビを省略するなどの改変を適宜加えた。

## 注

（1）大岡昇平「疎開日記」（初出「私の文学手帖」『群像』一九五三年九月号。執筆の期間は一九四六年四月一七日～四八年一月二一日である）、『大岡昇平全集』第十四巻、筑摩書房、一九九六。

（2）書誌について、大岡昇平『サンホセの聖母』作品社、一九五〇・六。角川文庫『サンホセの聖母』（五三・三）は「比島に着いた補充兵」「靴の話」「八月十日」の代わりに、「歩哨の眼について」「山中露営」「女中の子」を収録している。『ある補充兵の戦い』（現代史出版会、一九七七・一二）、徳間文庫（八四・八）と岩波現代文庫（二〇一〇・八）も出版される。単行本『ある補充兵の戦い』には著者のあとがきはなく、「編集あとが



き」(間宮春生記)が付されている。間宮の「本書の題名は『野火』のイタリア訳『田村一等兵の戦い』(一九五七年)からヒントを得たものである」という説明から、同書刊行の企画が出版社の側から持ち出されたものであったことが推察される。

(3) 同時代評には、河盛好蔵「鮮やかな志賀氏の作品・文芸時評」(『朝日新聞』朝刊、一九五〇・一・二二、四版)と中島健蔵「大岡昇平「出征」——新潮新年号所載〔作品暦〕——」

(『人間』一九五〇・三)の「出征」評がある。その他、亀井秀雄「大岡昇平の眼——リユンコイスの不幸——」(『文芸展望』一九七三・四)、丹生谷貴志「名付けと視線の錯乱——『歩哨の眼について』の分裂——」(『ユリイカ』一九九四・一一)、関塚誠「大岡昇平『出征』論——戦争、共犯の意識——」(『群系』一九九八・九)などがある。

(4) 大岡昇平「あとがき」『俘虜記』創元社、一九五二・一二、四三二頁。

(5) 尹慶一「生還者のエクリチュール——大岡昇平「西矢隊始末記」と『サンホセの聖母』の文体分析——」『言語態』二〇一〇、九二―九三頁。

(6) 例えば、「私が今日生きて帰ってこんな文章を書いていられるのは、ひたすらこの時この水を棄てたという一事に懸っている。」「私の生命は私の携行した手榴弾が不発だったという偶然に負っている。」「『俘虜記』「捉まるまで」といった文章から確認できる。

(7) 花崎育代『大岡昇平研究』双文社、二〇〇三、二五頁。(初出「大岡昇平戦後の出発——『俘虜記』「武蔵野夫人」「野火」」『国文目白』一九八四・二)

(8) 冒頭「俘虜といつても日本人ではない。我々の中隊で抑留してた比島人の俘虜が逃亡した話である。」(『続俘虜記』)という一文から、日本人俘虜を描いている『俘虜記』の連作を意識していることがわかる。

(9) 例えば、「西矢隊奮戦」で描かれた屍体や、「サンホセの聖母」で描かれたキリストの像や、「敗走紀行」で描かれた河原に流れる石油や燐の光に関する描写が挙げられている。

(10) 池田純益「大岡昇平研究——『野火』と初期作品——」(初出『国文学論集』一九七一・一二)、『日本文学研究資料叢書』大岡昇平・福永武彦「有精堂、一九七八、一四〇頁。

(11) 「かうして自然の中で絶えず増大して行く快感は、私の死が確実に近づいたしるしであると思はれた。／私は死の前にかうした生の氾濫を見せてくれた運命に感謝した。(…)そしてこの時私を訪れた「運命」といふ言葉は、もし私が拒まないならば容易に「神」とおき替へ得るものであった。／明らかにかうした観念と感覚の混乱は、私が戦ふために何千里の海を越えて運ばれながら、私に少しも戦ふ意志がないために、私の意識と外界の間の均衡が破れた結果であった。」(『野火』「文体」四八・一一二)

(12) 「すべてこれらの風物は、長い船旅に疲れた体の条件と相ま

つて、私を歓喜に近い状態に導いた。私はこれが私の生涯の最も幸福な瞬間であると感じた。私は死ぬ前にこういう幸福の時を与えてくれた運命に感謝した。(…)前途に死がなかつたなら果して今私にこの幸福感があるかどうかは疑問である。」「(比島に着いた補充兵)『世界の動き』四九・一〇・一五)

(13)『野火』の発表経緯について、まず『文体』第三号(四八・一一)では「野火」の題で発表され、『文体』第四号(四九・七)では「鶏と塩と」「野火」の2の題で発表される。二篇とも文末には「未完」とある。掲載された内容は、それぞれ現行『野火』の「一 出発」く「七 砲撃」と「八 川」く「一九 塩」にあたる。ところが、『文体』の廃刊により、「野火」の連載も中絶することになる。その後、五年に雑誌『展望』において、「野火」は改稿され、改めて連載される。

(14)花崎育代は「大岡昇平『俘虜記』における同胞の描き方」(『湘南文學』二〇〇三・一)において、『俘虜記』における同

胞俘虜への嫌悪の描出は、(…)激昂型ではなくプラス面や日常のありようも書き込むという固有の多面性のなかでこそ可能であった。」と指摘している。これは大岡の短編戦争小説における僚友の描き方とは多少異なるものである。

(15)「サンホセの聖母」は「麻逸国」「サンホセの聖母」「ドクトル」(音楽会)「ルイザとイザベラ」「ゲリラの妻」という六節に分かれている。

(16)初出(『新潮』一九五〇・一)では、「学資はなくとも身についた知識を得ることが出来れば、学生の集団的腐敗より免かれ得るだけでも利益であらう。」となっており、不幸や倅せなどの言葉が使われていない。これは『サンホセの聖母』に収録された時に改稿された。

(りんしえい／本学大学院博士後期課程)

表一・大岡昇平の初期戦争小説の発表一覧

題名	初出	掲筆年月日	その他
㊦ 「俘虜記」(↓「捉まるまで」)	『文学界』四八・一二	四七・五・二五	『続俘虜記』四九・一二
㊦ 「サンホセ野戦病院」	『中央公論』四八・四	四八・三・三	
㊦ 「レイテの雨」(↓「タクロバンの雨」と「パ 口の陽」)	『作品』四八・八	四八・五・三一	
㊦ 「西矢隊始末記」	『芸術』四八・一二	×	
「野火」	『文体』四八・一二	×	
㊦ 「靴と食慾」(↓「靴の話」と「食慾につい て」)	『小説界』四九・二	四八・一〇・三〇	『俘虜記』四八・一二
㊦ 「生きてゐる俘虜」	『作品』四九・三	四九・一・二〇	
㊦ 「戦友」	『文学界』四九・三	四九・一・二六	
「鶏と塩と」「野火」の2」	『文体』四九・七	×	
㊦ 「俘虜の季節」(↓「季節」)	『改造文芸』四九・七	四九・五・一〇	
㊦ 「俘虜逃亡」	『週刊朝日』四九・七	四九・五・一〇	
㊦ 「西矢隊奮戦」	『文学界』四九・八	四九・六・二〇	
㊦ 「建設」(↓「労働」)	『別冊文芸春秋』四九・一〇	×	
㊦ 「ミンドロ島誌」	『東北文学』四九・一〇	×	
㊦ 「比島に着いた補充兵」	『世界の動き』四九・一〇・一五	×	
㊦ 「外業」(↓「労働」)	『改造』四九・一二	×	
㊦ 「サンホセの聖母」	『文学会議』四九・一二	×	
㊦ 「海上にて」	『文芸』四九・一二	四九・九・一〇	
㊦ 「出征」	『新潮』五〇・一	四九・一〇・一九	



題名	初出	摺筆年月日	その他
「忘れ得ぬ人々」 「真藤君の思い出」	『別冊文芸春秋』五三・六 *未発表	× 四七・一一・二〇	『サンホセの聖母』角川文庫、 五三・三

注 『大岡昇平全集』第二巻及び第二二巻を参照している。「摺筆年月日」は各初出の文末による。×の意味は、初出に記載がないため、未詳ということである。なお、 $\square$ とは『俘虜記』(五二・一二)に収録された作品を指している。以下同様。即ち、 $\oplus$ ||『サンホセの聖母』(五〇・六)、 $\ominus$ ||『野火』(五二・二)。「↓」は改題もしくは作品が分割されることを意味する。